
東方操魂道

サネキ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方操魂道

【Nコード】

N1014Z

【作者名】

サネキ

【あらすじ】

目が覚めたら目の前に人の顔があつた。そしたら、なかなかヤバイ能力を持っているとわかった。人でなくなつたと気づいた。泣いた。そんな化物が日本をあっちへふらふらこっちへふらふら。そんなで幻想郷でのんびり暮らす物語

真っ黒、誕生（前書き）

物書き初心者がやっちゃった作品

駄文ですがよろしくどうぞ

真っ黒、誕生

目の前に人の顔がある。絶望してるような、苦悶の表情だ。目を閉じる、開ける変わらない。もう一度閉じる。あれ？何だ、瞼の裏に、今、立っているのが俺だと認識するのに納得してしまう、あらゆる情報が映る。あああ！頭が、割れそうだ。痛い、痛い、吐きそうになる。俺は、人間だろ！何だよ！これ！

はあ、はあ、落ち着けとりあえず整理しろ、頭の中をわかりやすく綺麗に……ああ、認めるしかないじゃないか俺は人間じゃない。そもそも手を見ればわかる人間のものじゃない。ぼやけて見えるのに真っ黒だ。人間じゃなくなった俺は一体何に、くそつままた流れてくる……そうアレだ昔読んだ、蟲の核 蟲みたいな奴だ。もつともアレみたいに集合体じゃなく一体だけみたいだな。そうだ、アレは魂を喰うんだよな。あああ！何だ、また、痛い、違うこれは俺のじゃない、目の前の人間のおお！『ここから出せ。早く早く！早く！！頼む出してくれ！！』うるせえええ！

俺は走り出していた気持ち悪くて、辛くて、訳がわからなくて、どうしようもなく、ただ我武者羅に。踏み出すたびに草が、手を振ってあたった木が、踏みつぶした虫が、ぶつかつた動物が、そいつら命を魂を勝手に吸っていく、俺が走ったばかりに、俺の中に入ってくる。

俺は何も無い岩山の頂上にいた。こいつは喰らわなければ弱っていく、そして、死ぬだろう。すまない、俺の中に入っているもの達、すまない、俺が死ぬまで待っていてくれ、そうしたら、きっと、解放される。待っていてくれ。

ああ、俺に次があるのか知らないがこんな記憶は絶対に持って行き

たくないな。

俺は目を覚ました、周りの風景は寝る前と大きく変わってた、岩が土が砂が多くなっている。

ああ、まだ俺はこれなのか『……きる！』うるさい、もう黙ってくれ、お願いだ。『今のお前ならできる、やってくれ！』……どういうことだ、わからない、俺にどうしろってんだ『頭の中で思い浮かぶはずだ、使い方が、能力が』【魂を操る程度の能力】……ああ、これが、なるほど確かにこれならできる。

魂を操るか、周りの草木がなくなるほどに吸って力が増したからか、それとも俺が魂を喰らうのを拒否したから性質が変わったのか『さあ、早く。出してくれ、ここは何も無い。ただ、俺が、俺たちがいるって認識できるだけなんだ』わかってるよ、少し待ってくれ……よし、さあ、これでどうだ。

何百もの光が体から出ていく。……ああ、綺麗だ。俺はこんなにも綺麗なものを閉じ込めていたのか、すまない、本当にすまない。

すると、また声が聞こえてきた。あの怨念に満ちたような声でなく、優しく温かく包みこむような声だった。

『謝るのは私達の方だ。君のような子にそのままの感情をぶつけてしまった。君が私たちのことを知れるように私達もまた君のことを』

知れるのだよ。それで、長い時の中で少しずつ見せてもらった。あのような時代に生きていた者にとってこれは辛かっただろう。……ああ、すまない、もう時間だ。君とはもっと話したかった。急かしてしまった私達が言うのも何だがな。私達はこれで去る。君はもう大丈夫だろう、能力を使えば。それと私達が持っていた知識は自由に使ってくれ封印する必要はない。では、さらばだ』

光が消えて行く、いや、天に昇っていく。

俺は気がつくと涙を流していた。もう苦しむ必要はないからか、もう人間だった頃に帰れることはないとわかったからか、それとも分けのわからない状況で、中にいたもの達が自分達のほうが辛かったはずなのに優しい声をかけてくれたおかげか、俺は声をあげて泣いた。ただ、泣いた。

あれから、どれだけの時が経ったか、少なくとも、1万回以上は太陽が昇ったと思う。

俺がそんな長い時の中で最初にやったことは人間だった時の主な記憶を絶対に開かないように魂の奥底に封印することだった。名前とかどんな顔だったとかいろいろとな。もっとも知識として役に立つことは残しているけど。多分その時は人間だった頃と決別したかったんだと思う。でも、知識は残してるしなんか意気地ないな。疲れてる状態でやったからこれの記憶が曖昧なんだよ。操って思い出すことができるけどなんとなくしたくない。

次にやったことは、自分がどんな姿をしているかだ、幸いにも、少し移動してところに池があったんでそこで確認してみた。そして、真っ黒だった。本当に真っ黒でちびだった。ジリのコダマをイメージすると早いだろう、あれの黒だ。しかも目とかの穴がなかった。どうやって見てんだと思ったが、まあなんだ俺みたいな存在がいるんだし、何か不思議なパワーでも働いているんだろ。

それから、能力がどこまで出来るのかだった。最初は全然で、せいぜい、むやみに吸収しなくなっただくらいだった。

そこから十数年諦めずに頑張っていたら変わった。何がって、姿が変わるようになったのさ。成長したと言えるのかも知れないが身長を170cmあたりまで自由に伸ばすことができるようになった。もちろん縮めれる。あと、こっちのほうが重要で自分が今まで吸収した奴の姿に変わることができた。しかも、その状態で同種に会うと会話ができた。と言っても、馬鹿ばかりで知能は高くはなかった。中にいたもの達には本当に感謝してもしきれない。

それから、調子にのって周り一帯の頂点に立とうとした。その過程で、驚いたのは妖怪がいたことで、しかも日本語を話す奴がいたことだった。すぐにそいつとは友達になった。でも、すぐに他の妖怪にやられてしまった。思わず悲しくなり、やりやがった奴を吸収して中で取るもんだけ取って消滅させてやろうと思ったけど、やめた。ああ、そうだと吸収だけど、合意の上ならやった、もつとも情報をもらったらずに解放してあげたけど。

毎日が充実してた、妖怪や動物、関係なく楽しんだし、騒いだり、馬鹿もやった。時々、別れがあったけど、そのたびに乗り越えてきた。悲しくもあった。でもさ、そういう奴に限って吸収してくれて頼んできて、しかも、解放されるときに『魂は別れてしまうが、心はともにある』とか、そんなくさい台詞言って逝きやがってさ、

そんな言われたら嬉しくなつて涙が出そうになるじゃないか、実際に
際には出てないみたいだが。まあ、いい奴らだったよ。本当に。

「どうした、やけに深く考えているではないか」

こいつは一番長い友達で妖怪だ。見た目はうり坊でかわいい。もつ
とも成熟した猪より倍はでかいんだけどな。それと口調が合つてな
い。

「いやなに、昔を思い出して、ちょっとな。………そういえばお前と
の会いはなかなか面白かったな、俺をふっ飛ばしやがって」

「あれはお主が悪い」

「何、あれはお前が悪いだろ、前をよく見て走らないからだ」

「いや、何を言うか。お主はあの時、今みたいに大きな姿をとつて
おらなんだし、なによりその色で日陰にいたではないか。それでぶ
つかるなと言うとは、それはなかなか難しいことだぞ」

「ぬ、そうだったか？ 悪い、ぶつかったことしか覚えていないな、
ちょっと待て、今探す」

「………お主の能力はこういう時便利であるな」

「お、あつた……あー確かに日陰で小さくなってぼうつとしてら。で、そのあと、俺が切れて何すんだ猪が……あれ、うり坊じゃんつて言っただな」

「あの時は自分だけ模様がなくならなくて、イライラしておったかな。あの時は若く血気盛んであった」

「そんで俺がお前をさらに馬鹿にして喧嘩になっただな。懐かしいもんだ」

「ああ、懐かしいとも、楽しかったとも……それで、お主いつ山を出て行くつもりだ」

ああ、やはり、気づいていたか。図体でかいくせに妙に察しがいいからな。

「いや、別に理由は言わんで良いぞ。どうせ飽きたとかであろう。しかしな吾とお主たとえば離れようとも心はともにあると信じておるからな、暇になっただらいつでも、戻って来い。吾はこの山の主であるからな、死ぬまでずっとおるわい」

「っ！この馬鹿、俺がその言葉に弱いつてわかって言っているだろ」

「ふははは、本当に弱いのだな表情が分からずとも感情が伝わってくるわい」

「まったく、この馬鹿が……お前の魂は絶対吸収するからな、勝手に死ぬなよ」

「おうおう勝手なことを言いおる、なら勝手に死なんように気を付
けんとな……行ってこい吾の友よ」

「……おう、行ってくるぜ。友達」

ふん、この馬鹿野郎。だからずっと一緒にいる奴は苦手なんだ。ど
いつもこいつも人の感情がわかりやがる。顔ないはずなのに。

……ありがとうなんて絶対に言ってやらん！

真っ黒、神を知るその1

森の中を歩く。目的地も決めずただふらふらと。真っ黒な人がふらふらと。

あの山を出てからどれだけの時が経ったのだろうか。にしてもいろいろなところに行った。とりあえず東、太陽が昇り始める方角へ行ったので大体は東のほうのだろう。そこから海沿いに北へ行ったのだけでも寒かってすぐ引き返した。考えてみれば今の状態、裸だからな。寒く感じるのも無理は無いだらう

道中は変化をしてもやはり危険な目にあった。変化すると姿だけが変わるのでなく、本質そのものが変わっているようで同種のものには怪しまれないのだけれども、その天敵にはひたすら攻撃されて大変だった。そういう時は本来の形になればいいと思うのだろうが、そもそも攻撃して興奮してる奴がいきなり相手が変わったからといって攻撃を止めるはずもなく、そのまま、攻撃をするやつが多いのだよ。匂いが激烈に変われば別なのだろうが、どうも、無臭のようだ

攻撃してもいいのだが、それは、あれだ俺は妖怪なのだが、妖怪としての攻撃手段が即、相手の魂を奪ってしまうことになるのであまりしたくないのだよ。せいぜい力は基本的な成人男性よりちょっと上ぐらいじゃないかな。やはり命のやり取りはお互いが同意の上でやるべきなのだと思う。決して取り込んだ相手が中で喚くのが嫌なんじゃないぞ。知らない相手の情報なんて無闇に知りたくないだらう。

「ふう、今どのへんだ？。しかし、こう森の中だと位置がさっぱりだな。姿変えようかな……前に会った狼のにしようか、こいつなかなか強かったしな、主だったのかな？それだとしたらまずかったかな、や、でも向こうから挑んでいきたくし吸収にも同意した、大丈夫だろ」

狼に変わると　もつとも、その姿を狼と捉えられる人は少ないだろう、真っ黒で霧のようなものが体を覆っている。なぜか取り込んだその生き物の情報が少ないと霧が出るようだ　視点が一気に低くなる。そもそもまだ四足歩行に慣れてない。でも、森の中だとこっちの方が進む速さが違う。もつとも空飛んだほうが速い。それに空からの景色もいいけど、これはあくまで旅なんだ、しっかりと地に足つけて、周りの風景を楽しみながら行くべきだろ。まあ目的地があつて急ぎのようだと空飛ぶけどな

空気が変わった。まずいな神域、鎮守の森の範囲に入っちゃったか？そつだとしたらさつさと出て行かないとまずい。しかし、どれだけの広さだ？遠回りをしても結局範囲内だとしたらめんどくさいな。一気に駆け抜ける方がいいか。何度か入ったことがあつたがあいつらどんな形になつてもお構いなしだし、滅ぼす気で攻撃してきたががったからな。まさしく、触らぬ神に祟りなしってわけだ。

「とう！……つかまえた！」

「ウォン！（くそっ！遅かったか！）」

いきなり上から何かが降ってきて背中に乗っかり、首をしめた。

「あれ、喋らないね、こいつが今噂の真っ黒妖怪じゃないのかい？
喋らないのかい。喋らないと私がつまんないだろ」

首がしまる、離せ、馬鹿。くそっ、この感じ神か。にしてもチビ
だな。

「おい、さっさと何か喋れよ、つまんないじゃん」

ぐええ、持ち上げんじゃねえ。くそったれ、チビのくせに。そも
そも、首しめられて話せるわけ無いだろ。まあ、本来の形に戻らな
いと人とは会話できないんだけど、神も本来のでいけるのか？やば
い……意識が、薄れ……魂喰解放！

「うん？　　っと、まずい！」

ぶん投げられて　　小さくても神である。大ききなんてあっても
ないような物である　　嫌な角度で木にぶつかった。

今日は厄日だ、ちくしょう。

「暇だねー、神奈子は寝てるし、参拝客は来ないときたもんだ」

守矢神社の祭神の一柱　もつとも、現在祭事などには一切出ていないのだが　洩矢諏訪子は暇であった。もう一柱の相方的存在である、八坂神奈子は連日の酒がとうとう回ったのかぐつすり睡眠り込んでいた。故に暇だった。そんなときに自らの領地である森の中で感じ慣れない妖気を感じ取ったのだ。そして、その正体を見極めるため、暇を潰すため直ちにそちらの方へ向かったのであった。

なんだいありや？あれから妖気を感じるってことは妖怪なんだろうけどこのあたりにあんなのはいなかったしね。新種かな？いや、そういえば昨年の出雲へ行ってた神奈子が面白い妖怪があちこち周ってるって神々のなかで噂になってるって言ってたね。確か、全身が真っ黒で、あと喋る……うん、あれだろうね。

こつちまであと少し。にしても見難いな、何の妖怪だ？まあ、なんだっていいさ、私の暇つぶし相手になってくれればね。

……よし、今！

「とう！……つつかまえた！」

さすが私ぴったしじゃないか。おう、意外とモサモサしてる、本物っぽいな、なんなんだこいつ？

「あれ、喋らないね、こいつが今噂の真っ黒妖怪じゃないのかい？喋らないのかい。喋らないと私がつまんないだろ」

まさか、間違えたのか？いや、でも、こんな黒い奴そう何匹もいて欲しくないんだか、無駄に不気味だし、よく見たら目とか無いし。

「おい、さつさと何か喋れよ、つまんないじゃん」

あれ？本当に喋らないね……あ、首絞めてんじゃん。そら、無理だわな。

「うん？　　つと、まずい！」

何だ体から力が一気に抜けたぞ。こいつの力か？本当に変わったやつだな。あれ？あいつどこ行っちゃった……お、いたいた。うん？姿が変わってる。やけに小さくなったな。妖気なかったら気づかないくらいだぞ。

「ありや、氣失ってじゃん。情けないね。こいつ、どうしようか……さっきの抜ける感じといい、ますます興味が湧いてきたな。よし持ち帰るとしよう」

うーん、なんか揺れてる？浮いてる？駄目だ、ぼーっとする。

「おや、目が覚めたのかい？」

なんだ、声がする。声？人の？……そうだ、さつき投げられて気を失ったんだ。

「こ、この、はなしやがれ……おまえちつちえーな」

あ、そうだ本来の形で小さいままだと喋るとなぜか内容が幼くなるんだった。やばいな、乱暴なやつだったら、どうしよう。

「誰が小さいだ！せめて幼いと言え！っていうか、お前のほうが小さいだろうが！」

「なんだと、おれはかんたんにおつきくなれるんだぞ。はなせ、みせてやる！」

必死にもがいて手の中から脱出し、身長を伸ばす。

「ふう、すまない。今のは俺が悪かった」

「……何者だあんたいったい？」

「何者だと言われても、俺、あー私にもわかりません。気づいたらこのようになっていたもので」

「別にそう畏まらなくてもいいよ、あんたは妖怪だろ。それに私はミシャグジ、無理に信仰させる気はないよ。天津や国津の一部の連中のようにね。まったく、あいつらときたら信仰ってのは自然と湧いてくるものであるべきだろ」

へー、神の中にもいろいろいるんだな。人間だった頃はそういうの興味なかったからな。

「ところで、今どこ向かってるんですか？」

「うん？ああ、そうだね私の社さ」

社っていうと神社だろ、神社ってことは。

「中に入っているのか？妖怪なんかが」

「何、私が神だ。私が許す。もっとも、もう一柱いるんだがね。ま、大丈夫だろう、面白いやつだし……それにもう着いた」

空気が先ほどと桁違いに重い。力の弱い妖怪だといえるだけで潰されてしまうのではないかと思えるほどの神気だ。しかも、目の前にある重厚感あふれるこの造り。こんな所に祀られているということとはさぞかし位の高い神なのであろう。……横にいる小さな神も

「これは、また立派な」

「そうかい。まあ、普段は奥の本宮にいるんだが、昨日はここで皆と飲み会やってね。ついてきてくれ、相方がまだ寝てるんだ。今から起こす」

そう言いながら奥へと進んでいく。そして部屋の一つに入って襖を閉めた。ここで待てってことだろう。それにしても中も外と劣らない造りになっている。この時代の庶民の家と比べると天と地ほどの差と言ってもいいだろう。にしても、まだ奥にあるだと、しかも本宮とか言ったからそっちの方がすごいのか？今の時代は平安もいってないだろうし、でも飛鳥時代に法隆寺ができたんだっけ、そうするとあっても不思議じゃないのか。いや、でもあれは聖徳太子が建てさせたとされているから、でもここは都から離れているだろうし、どうやって……まあ、神の力が何か

「おい、神奈子起きろ！」

「もうちょつと寝させてー」

「客だ、そんなだらしのない格好でどうする。乱れすぎだろ。さつさと整えてこい」

「……え？客？うそ、そんな予定あったか。ちよつて持ってもらえ、すぐ着替えてくる」

……声が聞こえているんだが。神社が立派でも祀られてる神がだらしない場合があるのか。

「おい、もう入ってきていいぞ」

呼ばれたので襖を開け中に入る。部屋の奥の一段高くなったところに背中に大きな注連縄を背負う？ふくよかな 主に胸が 女性がいた。しかし、その女性から放たれる神気は尋常ではなく少しでも機嫌を損ねたら一瞬で消し飛ばされるであろう。だが、あの先ほどの会話でいまいちその気にならない。だが知らずにこれが彼女であると見せられたら気を失う自信がある。ちらりと横にいる……名前なんだ？まあいい、小さい神の方を見ると付き合ってくれという表情をしている。まあ、それはやぶさかではないがな。

居住まいを正し、声をかけられるのを待つこと数秒。

「よく来た……妖怪。しかし如何なる理由をもってこの地に足を踏み入れた。その理由次第では」 つははは！いやー神奈子やつぱあんた面白いわ。さつきの会話聞かれてたのに、そんな態度取れるなんて「……え？どういうこと？」

「どういふことも、そういふことさ。こいつはさっきのあんたを起こすやり取りを聞いていたのさ。いや、聞かしていたのさ」

「いや、でもほらきちつと立ってるし」

「よく見てみる、口を引きつらして笑いを我慢してるじゃないか」

この幼女神め、人が我慢してるのを、っていつかさっきの全部わざとかよ。相方じゃないのか？

「……ええい、もう、諏訪子！今日も飲むぞ！お前も飲め！そして私のこの気持ちを発散させろ。いいな！」

さっきの威厳は放棄したんですね。っていつかさっきまで酒飲んで寝てたんじゃねえの

真つ黒、神を知るその1（後書き）

東方キャラ二話目にして登場。しかし、自己紹介両方ともしないですね

真っ黒、神を知るその2（前書き）

注意：人物が皆様の思っているものと大きく違う可能性があります。

真っ黒、神を知るその2

「飲んでいるか！？黒いの。おい、空じゃないか、ほら、私が注いでやるんだ、飲め！」

「おい神奈子、そうちまちまするな。ほらっ樽ごといったれ」

酒は飲んでも飲まれるな……か、本当にどうしてこうなった。

ちなみに、口は開けようと思ったたら裂けるように開きます。喋るときは開かなくてもいいのに変わった体だ。俺の予想では本来はついていない機能だったけど、能力を持つてから変わってしまったんだと思う。俺が食事は必要だと思っているからだろ。山にいたときに食事を取らなくても問題はないとわかってるからね。

「ってちよつと待って、神奈子様、首掴んで何するんですか。まさか本当に突っ込む気ですか。お酒ダメになりますよ、ああ待ってお酒はゆっくり飲むもののおお……」

「ふう、やっと潰れたか。おい、誰か、誰かいらないのか！」

手を叩きながら人を呼ぶ。にしても本当にもったいないことをした。

なぜ諏訪子はこの奴を連れてきたのだ？

「何か御用でしょうか、八坂様」

「ああ、すまんがその酒樽始末しておいてくれ。間違っても飲もうとするなよ。よくわからん妖怪を突っ込んだからな、そんな物飲んだら何かしら影響がでるかもしれん」

「かしこまりました。では、失礼します」

「頼んだぞ……さて、諏訪子よ、このような得体のしれない妖怪を連れてきたのだ？」

「ふむ、そうだね……ま、興味が湧いたからだね。そもそも、こんな奴がいるなんて言ったのは神奈子の方じゃないか」

「確かにそうだが、こいつは本当に……妖怪なのか？微量だが神気を持っている。こいつは能力持ちで、その能力で自分の本質までも変えられるのはわかったが、神気までもはありえないだろう」

本当にありえない、そんなことがあつては我々、神の定義が崩れてしまう。確かに妖怪の中に神の文字が入っている奴はいるだが、そういったに神気はない。

「神気については多分だけわかるよ。こいつがどんな妖怪かも言ってたよね……私はこいつに少しだけ吸われた」

「は！？神までも吸うというのか……待て！なぜ吸われたのに大丈夫なのだ？」

「少しだけって言ったる。多分こいつは自分より力量が上の者には吸い切ることができないんだよ」

「……そうだとすると、このまま放置しておけばいずれ神までもやられるようになってしまっぞ」

「大丈夫だよ。こいつは優しい、私に放り投げられても文句ひとつ言わなかった」

「その優しさが神を恐れてだったらどうする」

「しつこいねえ、なら今ここで始末するのかい？」

なぜ、諏訪子はそんなにのんきにいられる。こいつは神までも喰える存在となる可能性もある。神を殺せるのは神だけでなくてはならない。例外ができてしまうのはまずい、妖怪が殺せるのなら人間も思われる。いや、そこまで行かなくても絶対不可侵の存在ではないと思われる。そうなれば、我々の存在意義が薄れてしまう。それに我々は崇められなければこの地では力を発揮することはできない。

「……できるならそうする」

「考えが甘いねえ、そんなことしたら新たなこいつが生まれる。そして、新しいこいつは今のこいつみたいな性格をしていないかも知れない。」

「なぜそんなことがわかる。それにそんなの推測にすぎないだろ」

「……こいつは私達に似ている。こいつはきっと人々の死に対する

恐怖によって生まれた。それこそ全国の人の思いからね。まあ、妖怪として生まれたのは、自然が産土神を産んでその土地の調整を頼むように、自然が神として暴威を振るう前に強制的に介入して妖怪まで落としたんだろ。自然だって簡単に潰されたくないだろうからね。神奈子は神自身によって産まれたから気づきにくいかも知れないけど、上の連中は気づくと思うよ」

「な！？それじゃ、どうしろってんだい！今こいつを殺したとしてもまた新しいのが生まれてくる可能性があるんだろ。しかも今よりも悪くなるかもしれないじゃ、手の施しようがないじゃないか」

「……出雲へ連れてけ。時期的にも、もうそろそろだ。私は行けなからな。あそこへは、誰かさんが怖がったから」

「こいつを神に仕立て上げるのか。こちらがいつでも気付けるように」

「ああ、神にしてやれ。強制的にな。それこそ、名前に善の面が押し出すように和でもなんでも入れてやったらいい」

「……わかった。連れていってみる。だったら今回は少し早めに出たほうがいいかな」

諏訪子よ、まさかこうなることを見越してこいつをここに連れてきたんじゃないだろうね……まさか、考え過ぎか

「……という訳でお前を出雲へ連れていく」

「はあ、俺が何か神気を持っているから神となることを認めてもらうためにですか……そんなの別に俺神とかなりたくないんですけど」

「駄目だ。それだと私達が困る。お前はそのままでも危険なのに更に強くなって、もし神気が増したらどうなる、いろいろな奴から狙われることになるぞ。そんなんじゃ怨念垂れ流しながら死んでみる、寝覚めが悪いじゃないか」

まあ、悪いことじゃないだろうし、神の力持てばきっと能力の制御ももつとうまくいくようになるだろうけど、ちょっと急すぎるよな。俺が潰れてる間に何かあったのか？神社自体に何かあったような形跡はないし、暴れたとかではないと思うんだけどな。やっぱり俺は危険な存在だったのだろうか。俺はいてはいけない存在なのだろうか

「……わかりました。しかし、どうやって出雲まで行くんですか？というより出雲ってどこですか？」

「うん？そら、簡単だ。上に行く。お前は掴まっていればいい」

「空つてことですか、なら俺も飛べますけど」

「速度が違うだろ。一人抱えて飛ぶくらいなことないさ。で、もうこの辺でやり残したことは無いか？少しだけなら時間は取れる。」

向こうへ行けば当分は帰ってこれなくなるだろうしな」

やり残したことが、旅の途中で友達になるようなやつはいなかったし、あいつだってまだまだ死にそうになかったし大丈夫だろう。

「いえ、特に無いです」

「そうか……では、皆の者行ってくる」

「「「いつてらっしゃいませ」「」」

「……八坂様、洩矢様はいらっしゃられませんでしたね」

「ああ、諏訪子はいあいう皆が集まる場所にはなかなか来ないよ」

「何か理由でも」

「んーちよつとね」

「そうですか、すみませんでした」

「謝ること無いさ。もうそろそろ飛ばすよ」

それっきり会話はなく出雲までの空の旅は何事も無く進んでいった。

「…………着きましたか」

「ああ、着いたよ。……大丈夫かい？足がふらついてるよ、やっぱりきついのかい」

「いえ、少々ふらつときただけで特に問題はないかと」

「そう、ならいいけど。何かありそうだったらすぐに言うこと、いいね」

確かに問題はない。不思議とね。多分体が神気に馴染んだんだろ。神社で起きた時には初めて入った時のような重圧は感じなかったし。それでもふらついたのはこの重圧が凄まじいからだろう。もし神気を持たずにここに来ていたらどうなっていたことか。

「はい、わかりました……ところで、八坂様、こちらへ向かって来ておられる方はどなたなのでしょううか？」

「え！？あの方はまさか！」

「やー早いね、一番乗りだよ。えーと君の名前はなんだっけ、ちょっと、待って今思い出すから……そう八坂刀売神だったよね」

「はい、その通りでございます。スサノ才様、ご無沙汰しております」

「ふふふ、そんな固くならなくても、なんならお祖父ちゃんと呼んでもいいんだよ。」

「いえ！そんな恐れ多いこと」

「まあ、からかうのはここ迄にして……真っ黒な君、君はなんなのかな？妖怪のようだけど、神気も持っている。……ふーんなかなか面白い産まれ方をしてるね。で八坂ちゃん説明してくれる」

「それは皆が集まってからに「俺の事そんなに信用ない？」いえ！そんなことは」

「冗談だつて。まあ、楽しみにしてるよ。またね、真っ黒い君も」

八坂様が大粒の汗をかいている。それにしても、スサノオ様とはいきなり大物がでたな。こういう関係の記憶が少なくてもスサノオは知ってる。にしてもお祖父ちゃんとはいったい？ああ、まったくこんなことになるなんて、少しでも興味を持つておくべきだった。聞くのもなんだか失礼になりそうだし、やめておいたほうがいいよな。

「……立ち止まってどうした？」

「あ、はい。今行きます」

それからは驚きっぱなしであった。あの八坂様がごろごろと顔を変える。それはもう面白いくらいに。八坂様は位的になかなか所にいるのだろう。ちなみに俺のことは一言二言で終わった。それと洩矢様の名前が出ると真っ青になる方がいたり、逆に調子を聞いて

きたり色々な反応があった。そうすると、洩矢様はとても位の高い方だったのか。最初の対応は失敗だったかな、でもな、洩矢様がいいと仰られたことだし、大丈夫だろ。しかし、あの場では聞かなかったけど何で洩矢様はここに来ないのだろうか？何か事情でも……うん？なにやら会場がざわざわてきたな。どうした、なにか始まるのか？

「アマテラス様のおなーりー」

少々抜けた声と共に入ってきたのは日本で育った者ならほとんどが知っているだろう名だった。

確かにあれは太陽の神と言えるだろう。まるでスポットライトが当たっているが如く眩しい。それにしても最高位の神ということがある。さっきまでバラけていたのに続々とアマテラス様の近くに集まっていく。こんな光景を21世紀に生きていた人が見たらどう思うのだろうか？まさか、コスプレ集団とかと思ったりしてな。……そんなことを考えていると突然わらわらといった神々がこちら一直線に来れるように左右に分かれた。隣にじつといった神奈子様を見るとさっきまでと雰囲気打って変わって険しい物になった。おそらく俺のことなのだろう。そして、向かってくるのは

「聞きましたよ、八坂刀売神。話したいことがあるのでしよう。ああ、隣にいる……ほう、なるほど話したいことは大体はわかりましたが、やはりあなたに話してもらうのが一番でしょう。さあ、話さない」

「かしこまりました。アマテラス様」

真つ黒、神を知るその2（後書き）

建御名方神が都合を合わせるためいなくなり八坂刀売神が御子神となりました

真っ黒、神を知るその3

今まさに自分の運命を決める会話が俺抜きでなされてる。目の前で自分のことを話されるのは気分がよくないな。

小声で話されているので俺には聞こえないが時折聞こえてくる声に妙にドキリとするし、ちらりとこちらを見てくる。その視線がどうも奥底まで見抜くかのように感じる。でも、アマテラス様はまだ優しい顔をされている。それに比べて、周りを囲むようにいる神々ときたらこちらを射抜くような視線でなおかつ何も喋っていない。気を抜くと倒れてしまいそうだ。無言の重圧のようである。実際には神気の重圧が発生している。

このようなことで倒れてなるものか、こんな所で倒れたら何をされるか分からないし、絶対にいい方向に行くことはないだろう。そもそも、この程度で倒れては神になるなど認めてもらえないだろう。

実際の時間なら数分ほどしか経っていないだろう、でも体感時間的にはどれほど経ったことか、時計の針の音があったなら、どれだけゆっくりに聞こえていたのだろうか

「なるほど……やはり私だけで決定するには少々重いですね」

アマテラス様だけで決定できないとは自分のことながらどれほどの危険なのだろうか？自分では妖怪としての能力は俺の能力で封じていると思っているのだけど、それは思い違いなのだろうか。

「この子について神議りを行います。八坂刀売神、彼を別室へ連れていきなさい。」

「かしこまりました」

俺のことなのに俺は違う部屋で待機か……今は八坂様についていくしかないな

「八坂様、私はいつたいどうなるのでしょうか」

「……悪いようにはならないさ」

「しかし、何故、私のことなのに私が話に参加できないのですか。私の能力が危険であり、その処遇を決定するものであるから、下手に話に加わってこじらせないようにするためですか」

「……着いたぞ。ここで待っていればいい。大丈夫だ、危険だからという理由だけで排斥はされん……私もできるだけ良くなるように動く、安心しろ」

いまさら、俺が何言っても変わりはないか。大人しくここで待つしかないな。

それと、八坂様、最後のは嘘ですね。そんな無理やり作ったような表情で言っただけですぐに分かりますよ。

「分かりました」

ただそれだけを言って、襖を開け中に入り、部屋の隅にあった座布団を持ってきて胡坐を組む。たったそれだけの動作がひどく億劫に感じた。

俺はどうなるのだろうか。もしここだとしても、死んだとしたら悲しむ者など……あの山の主はどうだろうか、悲しんでくれるだろうか。いや、それも定めなどと言って悲しむことはないだろう。あいつはきつとそういう性格だ。旅の途中でも友達と呼べるようになるまでにいった奴はいなかったし、親しげに知り合いと言えるようにもなった奴はいなかった。洩矢様だって八坂様から話を聞いていなかったら無視していただろうし、そもそもあの御方達と俺は親しいといつていいのだろうか。きつとあの山の皆がおかしかったのだろう、誰だって好き好んで真っ黒で不気味な奴と一緒に、友達になる奴なんていないだろ。

この世に生を受けてすでに人間の感覚にとってはありえないほどの時間を生きた。俺の人生は良きものだったのだろうか……いろいろな所に迷惑をかけてばかりだったような気がする。たくさんの生き物の命を奪い、たくさんの生き物の気を使わせた。そんな人生が良きものなどと言える訳はないか。俺の能力はこの世にあつてはならないもの。これ以上迷惑がかからないようになるのなら、それが最後で最高の善行になるか。きつと痛みもなく

「暗い顔してるわねー。だいたい自分の生涯は最低であつたとか考えてるんでしょう。自分の生涯なんて自分で決めるものだけと決して迷惑かけたからって悪いと評価するのは間違いよ。自分がその行動に納得できたのなら、それは自分にとっては悪いはず無いのだから、他の奴の感情なんて無視しちゃいなさい。それとその方が良いと言っているのにあなたが否定してはだめよ、それはその方の行

為を無碍にしているようなものだわ」

え！？誰？っていうか、どこから、いつ入ってきたの？俺が考えすぎてたから気付かなかったただけなの？

「ふふふ、驚いたわね。だったら成功、私の勝ちね。ほら悔しがりなさい」

勝ちっていったい何の？っていうかあんだ誰？

「やつと、ましな顔になったわね。駄目よ、あなた唯でさえ黒いのそんな感情に浸ってたら暗くなって更に黒くなっちゃうわよ」

「いや、言ってる意味がよくわからないっていうか」

「あら、なに、暗い表情をしている方に手を差し伸べてはいけなの？そりゃ勿論この世の中全員を救うなんて馬鹿げたこと言わないけど、せめて目の前の方ぐらいはやるべきよね。こんなにも面白い時の中で後ろ向きなことを考えるなんて阿呆らしいと思わない？」

いや、だから急に一方的にそんなに喋られても反応に困る、何をどう返したらいいか迷うんですけど

「ふーん、まだ、さっきの状態から完全に立ち直れていないようね。よし。じゃ、さっさと、向こうに行って解決しちゃいましょう」

「ちょっと、せめて名前ぐらい教えて」

「いやよ、後で言ったほうが驚きが増すじゃない」

「はあ！？……もう、わかりました、素直について行きます」

「あら、だめよ。素直なんかじゃなく面白くするように努力なさい」

もう勘弁して。訳が分からないよ

きた道を早足で歩いて行く彼女の足取りはどこか楽しげで、これから起こる、いや、起こすことにワクワクしているに違いないと断言できるほどであった

「さーて、覚悟はいい？私は大丈夫よ。あなたもふにやってしないで、しゃきつとしなさい」

そう言いながら両開きの扉を豪快に開ける。もし近くにいたら吹っ飛ばされるんじゃないかと思うほどだ。開けた扉をそのままにせずかずかと入っていく、その歩みを止められるものは誰もいなく、むしろ周りが道を作っていた。俺はそれについていくだけで精一杯だった

「はい、久しぶりねアマテラス。元気にしてた？私に関係がありそうなのに私抜きで面白そうなことやってるじゃない」

「ど、どうしてここにいますか！？」

「スサノオちゃんがねー教えてくれたのよ」

そう言ったら、どこからともなくスサノオ様現れた。なるほどさっきまでいなかったと思ったら呼びにいったんだ。

「ちゃん付けは止めろって言ってるだろ。まったく。姉さんよ、こ

いつは母様の管轄だと思ったんだけどな、どうして断りもなく話進めちゃってんのかな？」

「それは……」

「あなただつて大変だつてことは分かるわよ。最近じゃ仏教つてのがこの国に入ってきた。そこには私達側の神がない。全体が染まることは無いと思うけど、それでも信者は減るでしょうね。あなたが造ったといつてもいいこの国を向こうの好き勝手されたくないつてのも分かる。でもね、入つてのは変わりゆくものよ。変わりゆく流れに逆らつてはだめよ。むしろ流れに乗つかつて流れを変えちゃいなさい。そうすれば、ある程度楽になるわ。それにあなただけが頑張る必要なんて無いのよ。ここにはあなたが声をかけたら手伝ってくれるのがたくさんいるわ。だからね、もっとみんなを頼りなさい」

「お母様……」

「で、本題に戻るんだけど、この子私に預からしてもらえないかしら」

「……どうして、お母様が？」

「あなただつてわかるでしょう？この子こんなにもおもしろ……私に似ているもの。だから調きよ……げふんげふん、立派な神にしてあげたいのよ」

「「……」」

本音隠す気ねえよ、この神様

「わかりました。そこまで言うならお母様にお任せします」

わかられちゃった。あれ、俺さっきから全然喋ってない気がする

「さーて決まったし、行くわよ。あ、それに名前も決めてあげなくちゃ、何て名前がいいかしら。あ、私の名前はイザナミね」

そんなタイミングで言われても驚かねえよ。はあ、俺は流れに逆らうことなどできず、ただ激流に飲み込まれているんですね。

只今、黄泉国にきています。でも今見てるのはおどろおどろしい光景ではなく、ただのいちゃついてる夫婦です。

「いやー本当面白いなーおまえ、いろいろな形になれるし、こんなにもちっちゃくなれるなんて」

そして俺自身は小さくなってスサノオ様の膝の上にいます

「うつせーばーか。あれはいつおわるんだよ。おれのなまえきめてくれるんだろ」

「あーあれな、いつ終わるんだろうな。にしてもおまえ本当に面白いよ。その状態になると言動が幼くなるのに中身はしっかりと普段

道理なんだろ。恥ずかしくね」

ええ、そうですとも、俺の神経がゴリゴリ削られていますとも。もつとも、こうなったのはそれを知った上で命令したあなたですけどね

「あれじゃね、修行が足んねえんだって、多分……よし、名前が決まったら俺が修行つけてやる」

「えーやだーつかれるー」

「やだってお前強くなれるんだぞ。かつこ良くなれるんだぞ。それに母様の属神になるってことは中々位高くなるんだ。そんなで弱くてどうする。だからな、修行だ」

そう言っただけ俺の小さな頭をぐりぐりされる。俺は渾身の力を振り絞って膝の上から脱出し大人の形になる

「修行、よろしく願います」

小さい状態でも言動が大人な状態にできるのなら、どれだけ厳しくても来い！ってやつだ

「あー！大きくなるなよ」

「そうよ、あなたは小さいほうが可愛いから。それと、名前決まったわよ。あなたの名前はヨモノタマオクリミコト、で漢字に書くと黄泉御魂送尊ってところかしら。尊にしたのはあなたがここに魂を送ってくる使命を持ってるってことだから頑張っただけ。じゃ普段はどう呼んであげようかしら」

「タマオはどうだろうか」

「だめよ。そんなの可愛く無いわ。あなた」

「むう、駄目か」

俺もタマオはちょっとな。失礼だけど抜けてる気がするし

「普通にミタマでいいんじゃないか」

「えー普通すぎない。ここはもっと「ミタマでお願いします」ぶー」

イザナミ様に決めてもらうと、どうなるかわかったもんじゃない。

「しかし、子どもができたと聞いて驚いたものの、いざ見てみてこ
う真っ黒だとはな。君、いや、ミタマには驚かされっぱなしだよ」

「いや、あの、すみません」

「そんなに畏まらなくても良い。イザナミの属神となれば私の息子
も同然だ。そこにいる馬鹿のようにもつと気軽に接してくれ」

「馬鹿ってどういう意味だよ！馬鹿って！」

「あなた、驚くのはまだ有るわよ。ミタマちゃんってばなんと今よ
りずっと先の時代で生きていた子なのよ」

「はあ！？なにそれ」

「ほう、興味深い」

「ちょっと、イザナミ様「違う」……母様それは内緒につて」

「こんな面白かった話内緒にしておけるわけじゃない。あ、アマテラスちゃんには黙っててもいいわよ」

「……引きこもるんじゃ」

「ははは、姉さんの引きこもりは未来でも有名か」

しまった、口に出してたか

「いや、あれはスサノオ様「俺も、俺も」……兄様が原因じゃないですか」

「未来でも我々の行いは記録されているのだな。うむ、よきかな」

「それがね、あなた、私達は創作上のもので、人間にとって人間と動物以外存在しない、つまり私達や妖怪はいないことになっているのよ」

「なんと、我々はいないと。記録では残っているのにいないとは、つまり……この国を創るための都合のいい存在として我々が創られたのか」

「ええ、多分そうね。まあ、それはいいのよ。何より酷いのは私がカグツチを産んで傷つき亡くなって黄泉国で化物みたいになって、それを見たあなたが私のこと捨てて逃げるのよ。しかも、その後に穢れを落としたものからアマテラスちゃんたちが産まれたことにな

ってるの。どう思う」

「なんと、愚かなことか。たとえお前がどんな姿になろうとも私が
お前を捨てるわけがなからう、こんなにも愛してるのに」

「ああ、あなた……」

そう言つて、イザナ……母様を抱きしめる、父様であつた。つて
いつか違う所でやってほしいんですけど

「兄様、母様たちはいつもこんな感じなのですか？」

「うん、まあ、そうだな。その記録と大きく違つてて驚いたか。あ
あ、それと兄貴つて呼んでも別にいいんだぜ」

「さすがにそれは遠慮します。他の神にどんな目で見られることが
わかつたもんじゃないんで」

「そんなの気にすること無いのに、ほかの有象無象の奴らよりお前
の位はずっと高いんだからな。しかし、ああなっちまったらもう止
まらんからな。よし、もう修行するか」

「はい、お願いします」

真っ黒、修行する

立派な神となる修行それはこの身となつて長い時を生きて心は人間な者にとつて常識を逸する物であつた。

「おら！死にたいのか！」

そう言つて剣を振るつてくるのは兄様である。言葉通り頭と体を離れ離れにする勢いのある横薙ぎであつた。もちろん避けきれない。そんなもの致死の一撃だ。しかし、死なない。死なないつたら死なないのだ。そう考えなければ俺は死んでしまう。

兄様曰く神とは神殺しの属性を持った攻撃を受けるか自らの精神が負ける、つまり生を諦めた時しか死なないのだそうだ。だから俺は斬られても死なないと思わないと死んでしまうのである。勿論気を失うし首は吹っ飛ぶに痛いがすぐに元通りになる

「考え事か？その隙の犠牲は大きいぞ」

そう言つて襲つて来るのは兄様が呼んだタケミカツチ様である。彼は剣は使わず徒手空拳であり、構えはボクシングに近い。一瞬で近づき左ボディブローを放ってくるがなんとか距離をとり躲す。が甘かつたようだ、顔を狙う右ストレートが眼前に迫る。その一撃は口の中が切れるとかでそういうレベルではない、なんとその拳に電気が纏っているのである。そんなもので殴られているのだ、その一撃を食らつた顔面の痛みは想像に難くないだろう。しかし、兄様とは違い絶妙に力の加減をされており気を失うことはない。きつと今、鏡を見たら酷いことになっているだろう。熱い痛みを感じるもすぐに治り、一息つこうとしたのが間違いであつた。何かが迫つて

くるのを感じ咄嗟に身を屈め、すぐに大きく距離を取る。

「……避けた、か」

彼もまた兄様が呼んだ一柱であるフツヌシ様だ。この方が扱うのは兄様のように剣であるのだが、長さが3メートルほどもある長大な直刀だ。それと兄様と違い一撃で刈り取るようなことはせず連撃を好むようなのだが、もっともその長大な直刀が霞むほどの剣速であるから当たれば一撃に違いない。

「はあ、はあ……手加減はないのですか？」

息を整えつつ、なんとしても聞きたかった質問をする

「手加減？ そんなものしたら修行になんねえだろ」

「それでも手加減しているつもりだが、駄目か？」

「……剣で加減は、難しい」

三柱とも軍神であるからそれくらいお手の物だと思っていたが、どうも違うようで御三柱の頭の中には戦とは敵が負けを認めるまで戦い続けると言う考え方なのだろう。そして、この修業では俺自身の力をつけるというものではなく、ただ戦いとはどういうものなのか教えるだけなのだろう。

現在、地上での被害を考えて空中でやっているのだが　ちなみに人の形でも飛べるようにするのにしたことはひたすら自力で飛ぶまで投げ飛ばされ続けた。何度吐いたことか。　地上では宴会が行われている。しかも俺の修行を酒のつまみにしてだ。普通あり得

ないだろ。これが神の在り方ということか。しかしな、離れた所でアマテラス様が頭を抱えて悩んでいるようだしどうなのだろうか。

やばい、こんなことを考えている暇は今のないだ。目の前の対処をしなければ……あ、フツヌシ様よって背後から袈裟斬りにされました。これで死なないって思うの大変なんですど。

今、上空で彼が修行をしている……あれを修行と言っているのか悩みどころだが、果たして私にあれをやれと言われたらどうだろうか。もっとも仮にも軍神を与えられているのだから、はい、と答える道以外ないのだが、あの三柱の猛攻を半日、そう半日も続けているのだ、それだけの時間心が折れずに耐えられるのだろうか。きっと彼は私よりも強くなれるだろうな……

「ここにまたしよげてる子、発見」

何とも陽気な声がしたので、ほぼわかりきってるがその声の主を見るため、声のした方を見た

「イザナミ様どうしてここに」

やはり、そこにはイザナミ様が立っておられ、普段通り柔和な顔をしておられた

「反応薄いわね」

私の反応が期待通りでなかったようで少々しょんぼりと肩を落とされた。

「今、私に声をかけてくるのは貴方様ぐらいだと。なにしろ皆思い思いに集まり、上を見ながら飲んでいますので」

「……ありがとね。ミタマを連れてきてくれて」

「彼には本当に良かったのでしょうか……私は深く考えもせずただ洩矢神に出雲へ連れて行けと言われたからそうしたのですが」

「あら、そうなの。だったら彼女にも感謝しないとね。あなたはミタマを神の石柱に加えたことを悩んでいるのだったらそれは思い違いよ、だってミタマってばあんなにも楽しそうにしているのだからわからない？よく見てみなさいな、彼には顔がない、つまり表情がない、だからこそ彼に心を開いた者は彼の感情が直に伝わってくるの」

心を開くか、今の私にはどうも無理そうだな。開くにはいらぬ感情が多すぎる

「まあ、今すぐできるようになりなさいとは言わないわ。でもね何時かはできるようになってあげてね」

「はい……しかし、彼と会う機会などもうあまりないのでは」

「いいえ、そんなことはないわよ。とりあえずミタマにはこの時期が過ぎたらいろいろな子の所を周ってもらおうと思ってるの。別に

黄泉国にずっと居させるわけでもないしね、ミタマの場合。だからね、あなた達のところにも行くわ、きつとね」

「そうなのですか。では、洩矢神にもそう言っておかないと」

「ええ、お願いするわ。それとあなた、あれに参加しないの？」

「あれとは上のことですか？」

「ええ、そうよ。あなた軍神よね。だったら参加してきなさいよ。面白いわよ、きつと」

「私には無理ですよ……」

「タケミカツチに負けて、洩矢神には勝った。けど、勝った気はないから」

……イザナミ様に隠し事は無理か。やはり、私と彼女との間に溝を感じるのはそのせいなのだろう。

「確かに彼女が本気を出せば私ですら負けはしないでも勝つことは難しいでしょう。彼女らは私たちとは系列が全く違う神。その力は人々の思いから生まれ人々の思いから行使される。敵に向かつて放たれる力は純然たる負の力。そんなものを直接浴びれば神といえども危険。しかし、その力の範囲はとても広い。彼女はそんな神の頂点に立つ存在。故にその力の行使はあたりの自然を壊すことと同義だから、彼女は本気を出せない、自らを慕う民のことを考えないといけないから。」

そうなのだろう、わたしはタケミカツチ様に負け、そして、その

腹いせと言つてもいいほどの感情で彼女の国を攻め、勝ち取った。しばらくはやはり私は強いのだという感情に満たされた。だが彼女の本当の力を知るとそんなことはまったく感じなかった。むしろ虚無感が現れた。しかも、私が国をおさめるために彼女の力を借りなければならぬほど、彼女らへの信仰は厚かった。最近などそんな気持ちを紛らわすために、私を慕うもの達と酒を飲んでばかりだ。

「でもね、彼女たちは自然から、人から生まれた神様。彼女たちはどちらかと言えば人に近くて人とは違う。だからこそ、彼女たちは自分が行ったことを最後には認める。見てみなさい、ここにいる神を、産まれが違ふことなんて気にせずみんな笑っているでしょう。あなたもね、彼女と酒を飲みながらも本音で語りなさい。そうすれば、そのもやもやは解消されるわ。」

なんでそんなことを私に言うのだろうか。そんなことを考えていると、私の頭に手を置かれ撫で撫でされた

「別にいいでしょう。あなたは言ってしまうえば私のひ孫なんだから」
まったく、イザナミ様にとっては私たちの系列はほとんど子どもでしょうに

「ふふふ、やっとまじな顔になったわね。よし、この期間中私と一回は一緒にお酒を飲むこと、その時に彼女との関係をどうするか聞くからね」

「……はい、わかりました。楽しみにしておいてください」

「あら、言つわね。じゃあ、びっくりな発言を楽しみに待っているわよ。じゃあね」

そういいながら、イザナミ様は立ち去っていった。私のことまで気にかけてくれるとは

「今度は、アマテラスちゃんでもからかいに行こうかしら。絶対に頭抱えてるもの」

……やっぱりからかいに来たのだろうか

死を伴う斬撃が、雷を纏い、時折氷になったり剣になったりする拳が、腕すら視認するのも難しい長大な直刀の連撃が俺の方へと迫る。その攻撃を右へ左へ上へ下へ前へ後ろへと避けることのできる道を一瞬も満たない時で探し出しそこを駆ける。

ようやくそのすべての攻撃を避けきれるようになった。太陽が一番上に到達する前から始め、太陽が沈み切る前にできるようになったのだ。これはすごい進歩だろう、もっとも10回に1回程度なのだが。

「はあ、はあ、また避けきってみせましたよ。どうですか、今日はこれぐらいで。暗くなってきましたし、まだまだ先があるんですから」

「何言ってるんだよ。まだまだこれからだったの」

「夜の戦は太陽がある時間とはまた違った趣があるものさ」

「……疲れたの？でも、私たちは疲れてない」

それぞれ、さんざんな返事をもらった。思わず泣きそうになる。なかなか酷いのはフツヌシ様だ。ああ言った後に、にやりと笑われた。フツヌシ様絶対サディストだろ。ちょっとだけ避けれるようになった時からフェイント入れてくるようになったし。他の二柱はそんなの入れてこないのに。

「じゃ、じゃあ、私が一撃でもどなたかに入れたらとりあえず休みというのは」

「お！言うじゃねえか、お前が俺に入れれるのか？」

「その心意気や良し！認めてやろう」

「……ってことは入れるまで休みなしってことだね」

「あーそうか、フツヌシ、お前良いこと言ってたわ」

あ！そうか、しまった。もっと考えて言うべきだった。っていうかスサノオ様最初と性格変わってね

「よし、じゃあ。お前の『神』をもっと見せてもらうぜ」
「ふむ、では。お主の『神』更に見せてもらおうしよう」
「……ふふふ、君『神』をもう少し見せてもらおうかな」

三柱とも似たようなことを言い、顔を見て、少し笑い、一斉にこ

こちらに向かってきた。その攻撃はどれも避けれるようなものではなく、ただ私は死を味わうだけであつた。正直言つて俺が甘かつたです。ちよつと避けれるようになったからつて調子にのつてすみませんでした。

結局、この期間で一撃を入れることはできなかった。もちろん、休憩は取つてくれた。軍神とはいえ、疲れはするそうだ。もつとも片手で数えられる程度だけだな。

それで、修行をつけてくれた結果なんと、能力の制御が更に上手くなった。具体的に言つとそのものとは違う形の状態で本質を変えたり、つまり形は人だけどいるのは犬としか感じなくなる。それに一部だけ違う形にできるようになった。と言つてもこれはあまり活用する機会はないだろう。何よりも嬉しいのは小さくなつた時でも大人になれるようになったことだつた。それを知つた母様はとても微妙な顔をしていたのは気にすることではない。

それで、なんでも、これが終わつたらいろいろな神の所を周り、在り方を学んでその地に小さくてもいいから社を建ててもらえつてアマテラス様に言われた。何でアマテラス様か少し悩んだが、特に気にせず聞いてると

「いっぱい社を建てて黄泉国に死者を送つてお母様を忙しくしてく

ださい」

とのことだった。その後

「嫌いなんですか？」

とからかったら、

「そんなわけ無いじゃない！ただ苦手なだけなんです……あ、絶対これは言わないでくださいよ。それと、最近仏教つてのが伝来してきてるって言ったでしょう。あれで一番寂しがるのはお母様なの。あれとこちらの死生観は違うもので、きっとあれが広がればお母様のところに行く霊は少なくなるの、お母様の性質上黄泉国からは滅多に出れず、こういう行事がある時しか無理なのよ。だから社をいっぱい作ってお母様の所へ行く霊を増やして寂しくならないようにしてあげて、それにあなたも定期的に行ってあげるとお母様も喜ぶと思うの、だから頼んだわよ」

最後のは本音だろう。まあ、誰のさしがねなのかは置いて信仰が増えれば力も増すそうなので各地に社を建てるのにはむしろこっちからお願いしたいことである。力が欲しい理由は勿論、修行をつけてくださったあの方々に強烈な一撃を与えるためだ。本社を先に建てろと思うのだから私の在り方とご利益が死に関することなので本社はそこまで要らないんじゃないかと考えている。

あと、母様の所へ行くのだが母様に聞いた所4年に一度ぐらいで良いと言われた。つまり4年に一度は必ず行かないといけないわけだ。もし、行かなかつたらどうなることか。いじり倒されることは間違い無いだろう。

それで、最初に神巡りに訪れた場所は守矢神社なのだが、今眼の前に広がっている光景はなんと八坂様が洩矢様に土下座をしているところだった。神社に勤めてる方に部屋まで案内されたところまでは良かったのだが、声をかけずに襖を開けたのはまずかった。ついでに案内した方はすでにいなくなっていた。なんという察しの良さ。あー八坂様そんな何とも言えない様な顔でこちらを見ないでください。美しいの顔が台無しになっていますよ。

きりきりと顔を前に戻しゆったりと立ち上がった八坂様は

「諏訪子今日の酒に付き合って」

「もう、しょうがないな」

対する洩矢様は何があつたのか何とも優しげで、実に嬉しそうな顔だった。

さて、ここから立ち去るため回れ右をしたのだが

「どこへ行く気だ。タマオクリよ。まさか帰るとは言わんよな」

その顔はいつものお美しい顔ではなく幽鬼の如き凄まじい形相であつた。こんな顔で頼まれたのであつては断ることなど出来ず

「ご相伴にあずかります」

と言うしかあるまい。しかしな、酒は出雲で浴びるほど飲まされたのだがな、あの数回もなかったの休憩の内に

「久しぶり、ヨミノタマオクリノミコトだったけ、改めてよろしく

ね。それと同じ神になったんだから洩矢じゃなくて諏訪子の方でよんでね。みんなそうしてるし。そっちはミタマでいいんだよね。あーあそれにしても私の予想とは違う結末になっちゃったな」

出雲へ行つた原因に、諏訪子様が言ったからと、神奈子様に、まあこちらにも名前でいいだろ、八坂様ってなんだか固いし、もつと立派な姓だと思う。今の彼女を見るとそうは思えない 聞いていたので気になるので聞いてみるとしよう。

「どういふことですか？」

「まあ、もうどうでも良くなったから言うけど、私たち側に組み込んで祟の力を増そうとしたんだ」

「え！？諏訪子そんな事考えてたの」

「ああそうさ、ミタマがこんな立場になってなくて、神奈子があんなこと言わなかったらね」

「危なかったー、私は思わずこの地を救ってたんだね」

「ま、本当に救ったのはイザナミとミタマだけだね。あんたは他人に聞かれたら恥ずかしいこと言っただけ」

「ちょ、言わないでくれよ。本当に頼むからさ」

そんなに言われると気になるんですけど、まあ、こんなに楽しそうにしている、諏訪子様だからきつと自分の中に置いとくんだろうな。

さてと、今夜は長くなるだろうから、気合入れていかないと。

真っ黒、修行する（後書き）

あれ、あんま修行の場面ないな

真っ黒、かぐや姫を知る

神巡りが終わり、はや一ヶ月が過ぎようとしていた。そんな私は現在どこにいるかといえば、日本の古典文学で一番有名と言ってもいいかも知れない、竹取物語の主人公である、なよ竹のかぐや姫のお側にいる。何故そんなところにいるかといえば、ただ単に讃岐造、つまり翁に拾われたからだ。

それは月がまんまるとして空には雲ひとつもなく空気が透き通り星々がはつきり見える綺麗な冬の夜空が広がっていた日のことだった。

「ああ、かぐやよ、あなたがどのような子であろうとも私の子に違いないのだ。私はもう老い先短い身だ。孫を見たいとは言わんが、せめて結婚してくれれば安心できるというものを」

私の小さな体の優れた耳にそんな声が聞こえてくる。今、私は21世紀の日本において最も愛くるしいとされる動物の一つである猫の形になっている。大きさは子猫以上親猫未満つてところだ。もつとも明かりのある所で見れば全身真っ黒で不気味でしか無いんだが、ついでになんで猫になつてるかと言うと、特に理由はない。

やけに大きな独り言だなと思っていると、足音がこちらに近づいてくるのを聞いた。

「かぐやを見つけたのもこのように月が綺麗な夜であったな」

と言つてもな満月つてのは人を狂わし妖怪の力を増すとされているんだ。だからこんな夜に出歩かないほうがいいんだけどな、爺さんよ。もつとも、今、俺は猫になっているからそんなこと言えないんだけど。

そんなことを考えていると何やら視線を感じたので上に顔を向けると、こちらを見ていたのか爺さんと目があってしまった。まあ、俺に目ないんですけどね。

「おお、こんなところにいて、どうしたのだ？親とはぐれてしまったのか」

そう言いながら、俺を抱きかかえる。夜の竹林の中にいるんだし、そう考えられても仕方が無いかな。

「なんという事だ！目玉がないではないか。可愛いそうに……そうだ、猫よ、かぐやの相手をしてくれぬか？動物までもがかぐやの美貌に惹かれはせんだろうが、そもそも目玉がないのであつてはそんなことは絶対に起こるまい……って私は何を言っておるのだ」

なんとなく、爺さんの言ってることに興味が湧いてきたので、鳴いてみるとしよう。

「にゃー」

「おお！お前さん人の言葉がわかるというのか」

今ので理解してるって思うのか、変わった爺さんだこと。出した俺が言うのも何だけど。

「これは、かぐやへの天からの贈り物なのかもしれんな。よし、そうと決まれば早速屋敷に戻るとしよう」

え、本当に連れてくの。まあ、ちょいと気になるし大人しくしとこうかな。

「かぐやよ、只今戻ったぞ」

「ああ、おじい様。あれほど夜の竹林は危ないと言っているのにまた出かけて。あら、竹は取っていないのですか？」

「そう言うな、私にとって竹林は庭も同然よ。それと、そのことだが今宵は珍しいものを見つけてな、これはかぐやにと思い急ぎ帰ってきたのだ」

「あらそうでしたの、ですので今両手を背に回しているのですね」

「その通り。ほら見てみる、暗くて見難いだろうが」

「猫ですか……あら、その猫、眼がありませんね」

「ああ、そうだとも。この猫ならばかぐやの美貌にも惹かれることはあるまい」

「おじい様ったら、さすがの私でも猫まで虜にすることはできませんよ」

「いや、どうだがわからんぞ。それになこの猫人の言葉を理解しとる。ほら、鳴いてみる」

なかなか扱いの荒い爺さんだ。まあいい、鳴いてやろうではないか。低く不機嫌っぽくな。

「にゃーお」

確かに美しいな。どちらかと言えば美女より美少女と言ったところか。時代が時代だしいいぐらいだろうが、私はもつと大人のような女性のほうが好みだ。なおかつ胸の大きな。しかし、神の身になつてこういう欲がほなくなっていなければ飛びついていたかも知れないな……兄様だったら飛びついてたりして

「あらあら、おじい様何かやったのですか、怒っているようですよ。ほら、こっちに来なさい」

そう言ったので、見えていないように演出しながら爺さんの腕から抜け出てかぐやのいる縁側の近くまで歩いて行く

「あらまあ、本当にあなたは言葉がわかるのかしら」

そう言いながら、近づいた私をゆっくりと抱きかかえる。うん、欲はなくても抱かれるのなら女性のほうがいいもんだ

「ねえ、おじい様この猫飼っていいかしら」

「ああ、勿論だとも」

そして、出会った日から数日経ち今に戻る。もちろん、日のある所であまり見られて変に思われたら大変なので、日中は縁側の下や屋根の上、もしくはどこか出かけてる風に装って屋根裏などにこっそりと居たりしている。

「またいなくなったのかしら……」

何やら普段より物憂げな気配が漂っているので気になり、ここにいると声を出す。

「あら、今日は下にいるのかしら、まったく気まぐれなんだから」

そう言いながら私のいる辺りの少し横に座ったようだ。

「……ねえ、聞いてくれる。おじい様ね、私に結婚しろって言うの。」

それは勿論わからなくもないわ。結婚して子を産んで一族が発展していくの、人間の社会はそうできているから。でも、彼らは私の容姿に惚れているだけなのよ、きつと。そんな方と一緒に幸せな生活を送れると思う？」

なるほどね、翁がしびれを切らして強く言っただろう。最初に会った時もそのような内容のことを言っていたし。

「それでね、とても熱心に求婚してくる5人の方に思わず無理なこと言っちゃたの。本当に探しに行ったのなら危険な目に合うわ。それまでに難しい事を言っただの。私はおじい様を安心させたいけど、どうしてもあのような方々と結婚するのは嫌なの」

そんなことを言ってきたので、縁側の下から出てひょいと上がり彼女の太もも辺りに顔を擦り付ける。まったく良い猫のふりをするのは大変だぜ。

「慰めてくれるの？ありがと……あんた本当に変わった猫ね」

それからは、あの物語通りにことが進み、現在彼女は月を見てはため息を付いている。

ああ、そういえば一つ気になったことがあって、車持皇子、つまり蓬萊の玉の枝を取ってきてというの難題を出された彼、もつとも名前が藤原不比等となっていた　が偽物を持ってきた時、奇跡的に残った、彼女の姿を一目見ようとして作った覗き穴から一人の少女が覗いて、偽物だとばれて彼がふられた時その少女からななんとも言えない様な感情が伝わってきた。おそらく彼の親族か何かな

のだろう。そして、彼が恥をかかされたことに我慢がならないのだろう。全く以て貴族らしい物の考え方だ。ま、憶測にすぎないのだがね。

さて、私の現実が起こっている物語はどのような結末を迎えるのだろうか。神話が違っていったのだ、これもきつと違うだろう。そうじゃなきゃ、何年もここにいた理由がなくなってしまう。

「……猫さんいるかしら？」

最初に会った時とは大きく違い、今の彼女に元気は殆ど無い。おそらく、自分がこの国の人でないと言っただのである。

「わたしはね、不老不死なの。それでね、月の都から追放されてきたの」

不老不死とな、しかも追放か、やはりこの世界は私が人間だった頃の世界とは違うものなのであるか。

「それでね、次の15日に迎えが来る。それは私を姫として月に帰すのではなく、ただの実験動物としてね。あの月の科学者たちの顔が思い浮かぶわ。猫さん、私は帰りたくなんか無いの、どうしたらいいの」

そう言って、泣き崩れる彼女を放おっておくことなどできず、ただ彼女が泣き止むまでそばに居続けた。

いつの間にかに脱がされ上に着物をかけられていた。おそらくあの後泣き寝入ってしまったから、部屋の中に移されたのだろう。今は未明から早朝の間といったところか。

ふと、外から地面を擦るような音が聞こえてきた。なんだろうと思ひ、着物を肌が見えないように簡単に着て襖を開けた。

そこには子どもほどの背丈の人がいて、なんとも不思議な踊りを踊っていた。人がいたといつても、それは人とは言えず全身が黒く顔は鼻などの凹凸があるのみでかろうじて人の顔だと認識できる程度のものだった。そして、その踊りはこの世のものとは思えず優雅でまるで庭がその踊りのために造られたかのような一体感を醸し出していた。

「……猫さん」

私は思わずその言葉を口に出していた。なぜ、このようなことを言ったのか分からなかったが、ただ、目の前の人を私も慰めてくれた。不思議な黒猫にしか思えなかった。

「やっと起きたのかい。起きる頃を見計らってずっと踊っていたんだ。さすがに疲れたよ」

そうは言ってはいるが決して怒っている風ではなく、ただからかっているような気がした。

「あなたは、猫さんなの？ だったら、あなたは何ものなの」

「最初の質問の答えは、はい、でもある。だね。それで2つ目の質問はあなたを救うためにこの姿になったで納得してくれないかな」

「私がそんな答えで納得すると思うの？」

「うーん、しないだろうね。まあぶっちゃけると神様なんだわ、私」

「神様？ふふふ、本当に変わった猫さんね、私を救うために来た神様だなんて、未来でも読めるの？」

「いや、最初は単なる好奇心だったんだけどね、あなたの最後の告白を聞いてね。私の神としての性質がこのまま放っておくと起こる出来事に対して許せなかったんだ」

「何の神様なの？」

「死を司る神さ」

死様とは私を殺しに来たのだろうか、この不老不死である私を。

「残念ながらね、あなたのそれを殺すことはできない。私の死の与え方は魂を抜き取るっていう方法でね。私の見たところあなたのそれは、魂と精神と肉体がとても複雑に絡み混ざり融け合ってるから、抜き取ることは不可能に近い。無理やりやろうとしても疲れるだけだし、どれだけ時間がかかるかわからないし、ずっと触れてくなくてはならない。そして、どれかを傷つけたらそこを補うように再生していくだろう。おそらく欠片から、灰からもね。死の神様なのに、お手上げだよ」

「……それで、その死の神様が何を許せなかったの」

「私は、生とは選択するもの、死とは与えられるのではなく迎えるものと思ってるんだ。この考え方は上司のような神にも賛同してくれてね。変わっているだろ、死の神なのに」

……私は今を生きてるのだろうか、死んでいるのだろうか。

「まあ、それはいいんだけど、考え方なんて人それぞれだし。本題はツクヨミって知ってる？もしかして月にいる？」

じゃあ、なんで言ったのよ。それより月夜見様のことを何で知っているの？

「その様子だと知っているな。後でその方のこと全部話すと約束しろ、そうしたら助けられる」

「助けられるってどういうことよ」

「私は人が望むことにしか力を使わないことにしているんだ。それと、神の力を舐めるなよ。相手がどれだけ強かろうとこの地においては私たちが最も強い」

「……無理よ、月の技術力はここなんかと比べものにならない」

「技術力ね。どうせ、道具が凄すぎて鍛錬なんぞしていないのだから。なれば、私たちが油断、慢心しなければ勝てないことはない」

……でも、目の前の神からはまだ子どものような背丈で強そうに見えないのだけだ。

「信じていないな。まあ、無理もない。このような形だ。だがね、あなたの本当の歳がその姿から推測できないようにこれは本当の形ではないのだよ……まあいい、とりあえず15日までには戻ってくる。それまで悔いのないように、どちらに転んでもあなたはこれまでと同じ生活は送れないだろう」

そう言うだけ言って、どこかへ飛んでいった……猫の時と全然違うじゃない。

帰ってこない、もう今日だというのにどうしたのよ。戻ってくるって言ったじゃない。もう夜よ。私は……

光が夜とは思えないほどの明かりが辺りを覆う。ああ、来てしまった。おじい様、おばあ様、申し訳ございません。

周りの兵士が何もできないまま、伏せていく。おじい様があいつらの言葉に無理やり聞かされている。次は私の番。ああ、何も見たくない、何も聞きたくない。羽衣を着せられたらもう私は

「姫、姫、ご無事ですか」

この声は聞いたことのある。

「x x なの……」

「その通りです。よかった、間に合ったのですね」

……周りが血で濡れている。××の変わった服も。

「不意を打って弓で射抜きました。何が起こったのかわからないまま、永遠の眠りについたことでしょう。さあ、早くここから逃げましょう」

そう言っ、私の手を取り屋敷から出て走っていく。おじい様たちは××の術にかかってぼおっとしていた。これなら私が逃げたということも気付かない。月の連中は異常に気づいて見に来た連中が片付けるだろう。

何だ、あの神が来なくてもなんとかなっただじゃない。そう思った瞬間、暗闇から光が走った

「っ！」

「××！大丈夫！？」

「大丈夫です、掠めただけです……しかし、これはまずいですね。まさか、気づいているとは。それに、数も多い」

確かに周りが竹で見難いけど、ざっと見ただけで20人以上はいる、それが全員武器を持っているとしたらさすがの××でも厳しい。

「どこへ行くこうなのかね。君たちの行くところは月だろう。このような穢れた場所ではないのだよ。さて、かぐや姫を渡してもらおうか、君も来てくれると嬉しいのだがね、君の頭脳は我々に必要なのだよ」

「嫌よ。もうあんな所にいたくない、でしょ、××」

「ええ、まったく。あのよう^にに停滞した場所なんかにいるくらいなら死んだほうがましです」

「そうか、残念だよ」

そう言^{つて}、一番前にいる男が銃をこちらに向^{けた}。いざとなれば私が庇^えばいいと思^{った}のに、あれはどんなものも貫通させる型の銃^だったはず。

「……姫、私が撃^たれたら、すぐにお逃げ^下さい。そうして自由を」

××が最後まで言^い切る前に光が

『私^を撃^ち負^かすことは叶^わず』

そんな言葉によ^{つて}阻まれ届^かなかつた。そして目の前になぜか夜^なのにはつきりと見える黒い神様^がいた

「遅^いのよ。猫の時と違^{つて}不親切^ね」

「私は人助け^が主な仕事^じゃない^んで^ね」

そう言^{つて}、にやりと笑^{つた}気がした、顔^が無いのになぜかそう感^じてしまった。まったくかっこ^つけてん^じゃない^わよ。

真っ黒、月の民を知る

「お前さあー、人が寝てる時に腹に蹴り入れる奴がどこにいの。絶対痣できてるわ、痣」

「ここにいますよ、兄様。兄様が早く起きてくれないから思わず足蹴にしたくなっただんです。兄様ならわかるでしょう」

「……言うようになったな。前はあんなに素直……まあいい、それより何であんな重い蹴りだったんだ？お前の重さからじゃ考えられないくらいだったんだけど」

「あれなら、信仰を得て、また力が増し能力の応用ができるようになったんです。ずばり、自らの重みを変える」

「そのまんまやん！っていうかお前の能力って魂関係で、重み関係ないだろ」

「それがですね、私を調べた所、私は肉体が無いことが判明しました……ちゃんと説明しますよ。我々は、まあ動物全般に言えることなんです、基本構成として肉体、精神、魂で成り立っています。ですが、わたしの場合肉体がなく、今は神力で覆うように形成されているようなのです。多分ですが、相手の魂に干渉しやすく、簡単に抜き取るためでしょう。それで、私の魂は自分の形を構成する情報を蓄えているのでそれをいじることにより重さまでもが変えられるということなのです。更に言霊により効果が増したりします」

「へえー」

まるつきり興味ないじゃん、自分から聞いておいて。

「ところでさ、今日何日？月、満月だよな」

そう言われて、月を見る。確かにまんまるとしている。確か今日は15日……

「あーもう、兄様が起きないからですよ！ほら、急いで」

「大丈夫だって、もう近くつぱいし、何かあり得ないほどの光量が夜なのにあつたし……あー今、多分姫さんのほう危険つぱいわ」

「え、本当ですか、どこ？」

「待て待て、じっとしてろ。そうこの位置……よし、さあ、助けに行つてこい！」

そう言つて、私の持ち上げ、ぶん投げた。

「怖！自分が制御できない速度で飛ぶのって怖！」

うーん、このような状況に慣れてしまっているな。神巡りの影響だろうが、豊穰の神の所で蝗害を防ぐためひたすらイナゴを狩りまくったり、いろいろやったもんだ。

そうこう考えてる内に自分でも見えるようになってきた。確かにあれはまずいだろう。人数が多すぎるし、かぐや姫を庇っている人は怪我をしてる。急停止させて呼吸を整える。武器の形状からあれは銃かな？だつたらこうだ

『私を撃ち負かすことは叶わず』

念のために言霊で効果を増しておく。相手の武器が神に届くかも知れないしな。

っ！ちよつと痛。しかし、ここで声を出さないのが男ってもんだよな。

「遅いのよ。猫の時と違って不親切ね」

「私は人助けが主な仕事じゃないんでね」

姫さんは俺が来たことで多少安心しているようだ。猫の時ずっと一緒にいたからな、結構信頼してるのかな。対するお仲間の方は何が起こったのかいまいちわかっていないようだ。

さて、敵さんの方も動揺してるな。もつとも、助っ人が来たことより防がれたことに驚いてるみたいだな。

「……うぬは何者だ。穢れた所の者か。否、そうであつたのなら、我々の武器が防げるはずがない。なれば化物の類か、しかし」

なにやら、言っているが最初以外小声で喋られて聞き取りにくい。まあ、最初のは聞き取れてので返事をしてあげよう。

「何者かと、問われれば。神と答えよう」

「ふつ。だいそれたことを言うやつだ。この穢れた所に神だと。そのような貴い存在がこのような穢れた者共の住まう所にいる筈が無いだろうが、冗談もほどほどにしておけよ。化物が！」

何ともまあ、思想の偏った考え方を、よほど月の教育は地上のことを下に置いているのだな。

これに兄様はどう答えるのだろうか。

「兄様、聞きましたか？ どうおもい、ます、か」

突然辺りに強く重い圧がかかる。

ちよつとどこにそんな怒るところがあつたの？ おいおい兄様の怒気が強すぎて青ざめているのが多い、これでは会話が成り立たない。

「兄様、申し訳ありませんが、どうかお鎮め下さい。これでは話が進みません」

「ミタマよ。お前はこれが怒らずにおれるというのか」

「……私には見当が付きません。理由の説明を」

「俺が怒ってるのはな、お前が化物扱いされたこと、この地が穢れた所などと言われたこと。何より、俺の兄がそのようなことを言うように教育させる環境を作っていることだ！」

まったく、兄様ときたら。

「私が浅はかさでした。では、ここにいる者共は、殲滅と言うことで」

「ああ、そうだな。こいつらとの会話など虫唾が走るわ」

「ちょ、ちょっとあなたは私を助けに来てくれたんでしょ」

よくこの状況で言葉を発することができたな、かぐや姫よ。兄様に氣を取られて忘れていた、すまん。

「ああ、すみません。兄様、彼女らは殺さないようにお願いします」

「わかっていて、そんなことをしたのなら本末転倒だろうが」

ふう、まだ、考える余裕は持っていらっしゃるみたいだな。よかった。兄様が本気になられたとしたら彼女らなんて同罪だと考えられるだろうしな。

「月の民と言ったな、てめえらの死に場所はこの美しい大地だ」

「ふ、ふぎけるな。そのような時代遅れの武器で何ができる!」

「何ができるだ? ふん、何でもできるのさ」

そう言っ、兄様は剣を抜いて収めた。そう、私にはそこまでしが見えなかった。後はもう相手が斬られて事切れているのがわかっただけだった。

これが兄様の本気に近い斬撃か、私がこの領域に辿りつけることは出来るのだろうか……おっと、私は私の仕事をしなくては。

「兄様、こいつらの魂どうしましょうか、とりあえず逃げられないように確保していますが」

「滅ぼせ、このような奴らを母様のところへはやれん。やって見つ

かりでもしたら母様が事を起こす」

「……わかりました。確かにそれは恐ろしいですね」

そう言いながら、手の周りに集めておいた魂を握りつぶし、消滅させる。こうすることで霊にもなれず、たとえ仏教を信仰していたとしても、輪廻転生することはない。もっとも中に吸収したほうが手っ取り早いのだが、そうすると俺の中に多少なりとも残ってしまうのだ。私とてこいつらは好きになれそうにない。

「終わったか。ところでミタマよ、さっき見えてたな」

私の方にも気を向けていたとは、まったく敵わないな

「剣を抜く瞬間だけです」

「そこを見れたのなら上等よ。お前は剣の才能がないようだが、剣筋を見れるようになるのは近いぞ」

おお、珍しく褒めてくれた。しかし、剣の才能はないと言われてしまったな。少々残念である。

「さてと、ツクヨミのこと、いろいろ聞かせてもらおうか」

あれまあ、彼女ら、震えていらっしやるよ。さすがに驚きの連続だったしな。わからんでもないがね。

「あの、馬鹿兄はそんなことをやってるのか」

話を聞く限りではツクヨミ様はなかなか選民思想の持ち主のようだ。

「そう言えば、兄様はツクヨミ様のことを月にいるだろうと当たりを付けていたのですよね。何ですか」

「ああーそれな、身内の恥を晒すようでなんだが、一回姉様に怒られて月に引きこもったことがあんだよ。あん時は姉様が上手いこと庇ったんでそこまで大きくならなかったんだけどな。それで、どこか行くなら月だろうと」

この一族って言うっちゃ何だけど問題起こしてばっかだな……は！俺も入ってしまうのか

「月夜見様ってそのような方でしたの」

「私はまあ、なんとなくは知ってはいましたけどね」

「へえーそうだったんだ、××伊達に年取ってるわけじゃないわね」

「歳の事は言わないでください、姫！それに私は望んで月に行つたわけでなく、たまたまそこに居合わせたせいで月への船に乗せられてしまったんです」

やっぱり、もう一人も年いつてるのか。きっと私より歳上なんだ

ろくな。

「それなら、月から逃げればよかったじゃない」

「ええと、あの場所が研究に没頭するのに良かったもので……」

「ところでさ、その××って言い難くない。もっと簡単な名前で呼ぼうや」

「え！」

「え！」

「え！」

思わず三人の声が揃ってしまった。俺には何て言ってるのかさっぱりで、よく言えるなと思っていたんだが。

「どうして、私の名前を発音できるの？」

「あん？そりゃ、それ神代の頃に流行った名前のつけ方だろ？ちなみに俺はスサノオって名前だ。呼びやすいだろ、だから、赤青の姉ちゃんもな」

「スサノオって、あのスサノオ様ですか」

「まあ、そうなんじゃないか。俺のこと知ってるようだが別に畏まらなくてもいいぞ、決して俺が偉いってわけでもないしな」

「そういう訳にはいきませんよ」

「別にどうでもいいのによ。ところでさ、お前どこかで見た覚えがあるんだけど。お前誰だ？その名前ってことはさ、あの時代から生

きてんだろ」

兄様人には隠しておきたいことだってあるんですよ。まあ、言わないけど、私だって気になるし。

「……私はオモイカネ様の弟子でした。会ったことがあるといえば、アマテラス様の岩戸隠れの際でしょう。あの時は全体が暗かったですし、顔をしっかりと覚えていなくても無理はありません」

「ああ、あん時のか。ふうん、オモイカネの弟子ってことはそのちびっ子をその体にしたのもお前か」

「はい、その通りでございます」

「ちよつと、ちびっ子ってどういうことよ。これでも都で数多の人を魅了したのよ」

「姫さんはちよつと黙ってようね」

そう言って肩に手を置き、かぐや姫を後ろに引っ張っていく。あ、何かぶすって頬を膨らましてるし。こういうことしてると体相應な歳だろうって思えるのにな。

「まあ、何だ。とりあえず名前だが……八意、でいいだろ。お前実際賢いんだろ」

「そんなおそれ多い名前を」

「不老不死の薬を作れる奴がそんな謙遜すんじゃないの」

「……では、その通りに」

「兄様畏まらなくていいって言っておいて結局偉そうなんだから」

「別にいいだろが、話が早く進むんだからよ」

「あのさ、ところで私はそのスサノオ様、がどれだけ凄いか知らないんだけど×、八意がこれだけするから偉いんだろうけど、あんたは実際偉いの？死の神とか言ってたけど」

俺のことか？そら、高い位なんだろうけど、新参者だしそんな気は持っていないな。そもそもこの国の神一定以上を超えないと偉いつて感じしないし。

「ああ、八意なら名前でわかるんじゃないか。なにせ黄泉魂送尊って名前だからな」

「ヨミ……黄泉ってことはイザナミ様の属神ってことかしら。それにタマオクリノミコトってことは黄泉国に魂を送る使命を持った神様ってこと。それって結構な位の神じゃない」

「ははっ、やっぱ賢いじゃないか」

「なんで、結局魂を送るだけなんでしょ、あんまり偉いとは思えないけど」

「何言ってるの、死後の魂を黄泉国まで送るってことは、神々が亡くなった信者を一旦預けている、つまり神がミタマ様のことを信頼しているに他ならないのよ。人間は基本的に死んだら祖霊になりその土地を守護する、つまりその土地の力を増す要因の一つ。そんな存在である霊を他の神に預けるなんて本当に信頼されないと無理な

「ことのはずよ」

「神々の信頼を得てることかなるほど」

「まあ、霊は基本的に黄泉国に行くのが習わしになってるからな、それから産まれた土地などに戻り祖霊として扱われる。帰りたくない奴はそのままだりするけどな」

「自分ではそれほど偉くないと思うんだけどね。むしろ大変だから、いったいどれだけ分霊を作ったことか。しかも最近では故郷まで送ってくれて言われることあって、時々自分でも驚くほどの速さで駆けている個体を見つけることがあってね」

「大変そう……ああ、だから猫の姿になって休んでたんでしょ」

「あれは違う。彼らは一時的に眷属になってもらっているんだ。どこかが足りてないと基本的に死が近いからね。眷属になって眼や耳の代わりをすることで死後の安全を約束しているのさ。ちなみに情報を伝えるかは彼らに任せているんだが、それで姫さんのことを聞いたんだよ……おい、後ろを見てみな、あの猫が来てる」

「えっ……本当にあの猫が来てるの？」

そう言っただけで猫に近づいていく。少し涙声になっているようだ。彼女が辛い時の心の支えのような存在になっていたからな。

（おい、あれっでお前だろ、何が眷属だ）

（そら、こんな者に話を聞かれていたなんて思いたくないでしょう）

（まあ、わからんでもないな。こんな奴に恥ずかしいこと聞かれていたなんて思うと死にたくなるだろう）

……兄様って、話したことが相手を傷つけるなんて思ったこと無いんだろうな。

（ありがとうございます、私たちを助けていただいて）

（まあ、俺は馬鹿兄の話が聞けるかも知れないと聞いたから来ただけだ）

（そうですね、私はただ彼女が少しかわいそうに感じただけです、それにもう、あんな薬作らないでくださいね）

（ええ、わかっています。不老不死なんて共に歩んでくれる方がいなければ辛い道にかなりません……そう言えば姫が誰かに薬を渡しているような）

（誰かって屋敷に居た人ですか？）

（そのはずです。乗ってきた車になぜか置いてあったものがなくなっていましたので）

爺さんは飲まないだろうし、帝はどうだろうか？会ったことがないからわからんがあの和歌を見るかぎり、かぐやがいないのであれば飲もうとしないだろう。ならどこかに廃棄させるはず、その途中で使者が使命をしっかりと果たすかどうかだな。まあ、私の知る所ではない。

（まあ、大丈夫でしょう。あなたの罪にはなりませんよ。作り手が

罪の意識に囚われては新しい物が出てこなくなりますし、手から離れ使用された物の責任と取っていたら切りがないでしょう」

(……ありがとうございます)

「ねえ、八意こっち来て猫触つてみたら、とっても気持ちいいよ」

「はいはい、わかりましたよ。姫」

なんだか、二人共ほつとしているようだ。とりあえずは月からの追手を気にしなくてもいいからか。

「兄様、あの二人どうしましょうか、このままほっておくには少々忍びないですけど」

「まあ、そうだろうな……オモイカネのところにも連れいくか。お前も来いよ。俺が説明するのも面倒だし」

「なるほど、わかりました」

適当に安全そうな場所を紹介するよりも神のところへ連れていったほうが安全だろう。それからは、まあ彼女たち次第だな。

今年にイザナミ様のところへ顔を出さないといけないけど、まあこの話を土産にしたら大丈夫だろう。多分。きっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1014z/>

東方操魂道

2011年12月16日20時54分発行